

生徒の「やりたい」を起点に、 地域と関わりイノベーションを起こす

都城商業高校（宮崎県立）

学校外に「出島」をつくり、
地域と新しい価値を共創する

肉と焼酎のまちとして知られる宮崎県都城市にある都城商業高校。生徒たちが「やりたい」を起点に地域に飛び出し、地域の人と一緒に地域を盛り上げる活動をしているのが、「共創ウエルビーイング部」だ。「まちのゆるやかなつながりづくり」をコンセプトにした「のくにプロジェクト」を立ち上げ、地域でワークショップやイベントを開催してきた。活動開始時の部員は4名だったが、4年

目を迎える今年度は30名を超えた。生徒たちの活動を見守ってきた北郷晶子先生は、「のくにプロジェクトの存在は、今や地域にとって大きなインパクトのあるものになっている」と言う。

発端は、閉店した校内の売店を復活させようと立ち上がった、有志の生徒らによるプロジェクトだった。かねてより、生徒がやりたいことを応援したい、生徒が地域と関わる取組を後押ししたいと考えていた北郷先生は、生徒が地域の事業者と連携し、共同開発した商品販売するなど、「生徒たちがイキイキと活

動する姿を見て、地域の人と関わる価値を再確認した」と振り返る。

地域の人と生徒と一緒に、新しい価値を生み出したい。みんなの「やってみたい」が掛け合わさったら、想像もつかない場所に辿り着けるんじゃないか。まずは、いろんな人の意見を聞いてみたい。そう考えた北郷先生は、地域の人々と生徒に呼びかけて対話のワークショップを開催。「10年後の都城に、こんなの、どう？」をテーマに語り合った。そこで自分がやりたいことを語ると、「学校の中だけでやるんじゃないくて、外に出しちゃえばいいじゃん」と言われ、ハッとしたという。「学校外に出島的な組織をつくり、そこで生徒が地域の人たちと新しい価値を生み出し、その価値を学校に取り込む……という流れをつくる」。そんな構想を描き、当時の福祉部を共創ウエルビーイング部と改称し、活動をスタートさせた。

地域の人々が集い、
つながれる場をつくりたい

1年目は、地域の子どもが店長を務めるパン屋さん企画、図書館での紙コッパタワーづくりのワークショップなど、「生

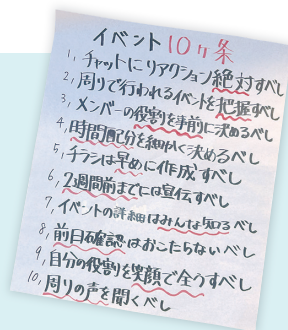
写真左から、商業マネジメント科3年の田中さくらさん、同・有蘭瑛花さん、共創ウエルビーイング部顧問で国語科教諭の北郷晶子先生。



徒がやりたいことをどんどんやった」と北郷先生。「ゆるさ・ゆらぎ・ゆとりを大切に、年間計画は作らず、ゲスト部員も大歓迎。生徒が気軽に参加できる活動にしたかった」と言う。一方、自身は「ジエネレーター的な関わり方」に徹した。人と人をつなげたり、生徒が一歩踏みだすための仕掛けを考えたりと、「生徒と対等な立場で一緒に考え、活動している」と言い、そのスタンスは今も変わらない。

創部2年目に入部し、現在は部長を務める有蘭瑛花さん（3年生）は、「のくにプロジェクトは、地域とつながりながら自分がやりたいことができる場」と笑顔を見せる。活動を広げるなか、有蘭さんをはじめメンバーたちは「せつかくイベントで出会ってもその場限りになってしまう、つながりがつけれない」という課題を感じるようになった。「ここに来れば誰かに会えるという場所をつくりたい」という思いからできたのが、「のくにラボ」だ。アイデ

※「のくにプロジェクト」の「のくに」は、宮崎市内にあるアミューズメントパーク「こどものくに」に由来。「子どもだけでなく大人も含めてみんながつながり合えるまちづくり」の意を込めて、「こども」を取り「のくに」と名づけた。



アをかたちにする難しさに直面しつつ、場所探しから改修・内装まで地域の人々の協力を得て、昨年7月、薬局の跡地を改装した拠点がオープン。現在は、生徒主催のイベントや地域の事業者とコラボした企画などを定期的に開催している。

「実験できる場所、失敗しても大丈夫な場所という意味でラボと名づけた。自分たちが考えたことを実際に社会にぶつけてみるのが大事」と北郷先生。実際、「自信满满で地域の人にプレゼンしたらダメ出しをされたこともあるし、イベントにお客さんが全然来なかったこともある」と有園さん。失敗から学んだ教訓は「イベント10ヶ条」として共有し、経験を活かし合い改善を重ねている。

のくにプロジェクトを通して地域の人々とふれあい、その笑顔を見るなかで、有園さんは「地域の人たちも、集まれる場所が欲しかったのかもしれない」と気づいたと言う。有園さん自身は、幼い頃から近所の高齢者の方々にかわいがってもらい、餅つき大会やラジオ体操といった地域のイベントにも参加してきた。しかし、「コロナ禍でこうしたイベントがほとんどなくなり、「つながりも希薄になってしまった」と感じている。実際、小学生の妹は地域との交流があまりないそう。」「世代を超えて地域のひとと人がもつとつながれたらいいと思うし、将来は、そういう地域の場づ

くりに携わりたい」と語ってくれた。

消えつつある紙漉き文化を再生。地域の眠った魅力を掘り起こす

出島の存在であるのくにプロジェクトに対し、そこで得られたつながりや知見を校内での実践につなげたのが、3年次の課題研究のゼミの一つ「紙漉き文化再生プロジェクト」だ。かつて都城市で盛んだった紙漉き産業の再生を目指し、地域での紙漉きワークショップの開催や和紙を使った商品開発などに取り組んでいる。例えば昨年度は、地元の酒造メーカーと協力し、焼酎の蒸留過程で出る廃棄物を混ぜたリジェネラティブ和紙を開発した。2024年度に県より「循環型社会を実現する環境教育推進事業」の指定を受け、「地域のひととの雑談のなかで紙漉きを知り、環境教育とかけ合わせたら面白いと思った」と北郷先生は経緯を振り返る。

紙漉き文化再生プロジェクトも、仕掛け人は北郷先生だが、主体になって進めるのは生徒たちだ。先輩たちの課題研究の発表や記録（研究日誌）、動画などから紙漉きの伝統や手法を学ぶことから始まる。田中さくらさん（3年生）は、「先輩たちの活動を受け継ぎたい、紙漉きをやってみたい、地域のひととつながりたい」という思いから選択。仲間と試行錯誤しつつ紙漉きの技術を習得し、5月には第一弾として地域の高齢者に向けたワークショップを開催した。

プロジェクト活動を通して「消えつつある地域文化の再生に携わっているんだ」という誇りが生まれた」と話す田中さん。紙漉きのことを伝えたい、という思いでワークショップに臨んだ。一方、高齢者と話すするなかで、「昔は障子の張り替えのときに、剥がした和紙を溶かしてもう一度和紙に漉き直していた」と教わり、「紙漉き文化の知見がまた一つ増えた」と言う。

人前で話すのが苦手だったが、ワークショップやその準備をするなかで、「地域の大人や高齢者の方と話す機会が増え、自分にはない考え方や見方を知ること



【右】楮（こうぞ）や水の量を調整し、記録をつけながら紙漉きに励む生徒たち。【左】今年5月に開催したワークショップでは、先輩たちから受け継いだ「紙漉き文化再生プロジェクト」の取組についても紹介。

ができた。人と話すことで視野が広がり、自分も成長できるんだと感じ、地域のひとともしっかり話してみたいと思うようになった」と自身の変化を語る。地元・宮崎が大好きだと言い、卒業後は宮崎大学地域資源創成学部で地域と経営について学び、将来は「宮崎の人がずっと住み続けたいと思えるまちをつくる仕事に就きたい」と話してくれた。

こうした取組により、同校は第14回キヤリア教育推進連携表彰で最優秀賞を受賞した。実際、卒業したのくにプロジェクトの初代メンバーは、ソーシャルイノベーターや地域の魅力を発信する編集者、地元の高校生と関わる仕事などに関心をもち、それぞれの道を歩んでいる。生徒たちを「共にイノベーションを起こす仲間」と称する北郷先生は、「生徒と同じフィールドに立って、同じ目線で考え、挑戦し続けたい」と言う。

「学校から地域に飛び出すことで、生徒には、いろんな人に出会い、いろんな職業や生き方に触れ、たくさんさんの選択肢があることを知ってほしいと思っています。そして、地域の眠った魅力を掘り起こす面白さを体感し、この地域にはもっと何かあるんじゃないかという期待感をもってくださる……と願っています。すでにあるものの価値に改めて目を向けることにこそ、地域における新しい価値創出の本質があると思うんです。これからも尊敬できる仲間たちと、地域でイノベーションを起こしていきたいと思っています」